

地域の石材としての木下貝層

<七山 太¹⁾・中島 礼¹⁾>

千葉県北部に広がる下総台地には石材として用いることができる硬い岩盤は露出しない。下総層群の最上部に位置する木下層^{きおろし}は、約 12.5 万年前の下末吉海進によって生じた古東京湾沿岸域に堆積した浅海成砂層を主体とする。模式地である印西市木下においては、古くから“木下貝層”と呼称される。現存する木下万葉公園の大露頭は 2002 年に天然記念物に指定され、印西市によって整備・保護されている。この露頭下部の含化石層からは暖流系の内湾潮下帯の貝類を主体として 100 種類以上の軟体動物化石が記載されており、この化石層が当時のこの地域に存在していたバリアー島間の潮汐三角州の前置面上に吹き溜まって生

じたものと理解される（岡崎・黒住，2008）。特に貝化石が濃集する含化石砂層の上位および下位には厚い泥層が発達し、飽和した地下水によって貝殻起源の炭酸カルシウムが溶出し、それによって周囲の砂層が固結したとされる。

一方木下貝層は、古くから地域の石材として活用されてきた歴史を持つ。特に、江戸から大正時代には、木下は河岸^{かし}として栄え、この時代に行われた利根川の大規模改修工事の際には、付近から大量の土砂が採取され、含化石層も採掘されたとされる。さらに遡ると、古墳時代に作られた印西市内の上宿古墳、松山 2 号墳および栄町の龍角寺岩屋古墳の石材として用いられていることが、地元ではよく知られている（印西市教育委員会，2012）。



第 1 図 木下万葉公園の木下貝層の大露頭。上面を常総粘土および関東ローム層が覆う。



第 2 図 貝化石の濃集層。離弁した二枚貝が層状をなして累重する。この部分を石材として大規模に採取していた。カシパンウニが散在している。化石層の厚さは 6 m に達する。

1) 産総研 地質情報研究部門

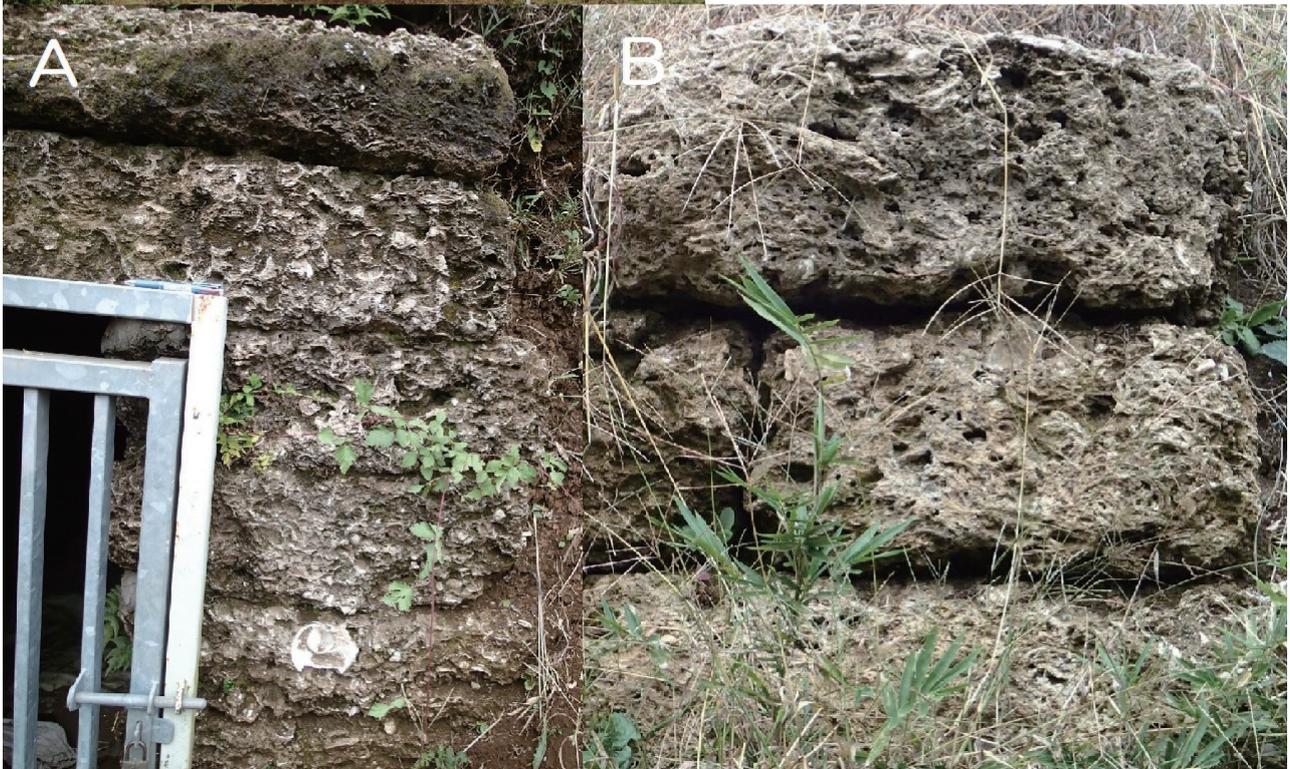
NANAYAMA Futoshi and NAKASHIMA Rei (2015) Kioroshi shell bed for a regional stone resource.



第3図 木下市街地に認められる木下貝層を使った灯籠や石垣等の構造物。



第4図 千葉県印旛郡栄町の“房総のむら”付近にある龍角寺岩屋古墳（7世紀前半～中頃）は、国の史跡に指定される規模の大きな方墳である。写真にある横穴式石室の部分には、木下貝層を石材として用いている。



<引用文献>

岡崎浩子・黒住耐二（2008）国指定天然記念物「木下貝層」（更新統下総層群木下層）の地質学的意義．千葉県立中央博物館自然誌研究報告，10，1-13.

印西市教育委員会（2012）木下貝層－印西の貝化石図集－<第4版>．印西市，93p.